

武蔵野日曜聖書講筵 復活節祈禱会

平安汝に在れ

—ルカ伝第24章36～49節—

1976年4月18日

小池辰雄

上からやって来るもの 平安 汝らに在れ なんじら何ぞ心騒ぐか 霊体 キリストの outlet
旧約聖書を身体で体現 十字架・聖霊の絶対恩寵 主と一体一如になる 十字架の門から聖霊
の世界に入る 祈り

【ルカ24・36～49】

36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、³⁷かれら怖じ懼れて見る所のものを霊ならんと思いに、³⁸イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰斯く言いて手と足を示し給う。⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言い給う『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。⁴⁴また言い給う『これらの事は我がな汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さざる悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。』⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』

●上からやって来るもの

復活節の最後の集会です。先程、感話会がありました。人間というものは、環境、運命の問題や、心の問題や、さまざまあるわけですね。けれども、自分の心とか、信仰とか、そういうような問題もみんなこの祈禱会ではキリストに全部そのまま自分自身をお預けする。この祈禱会は是非とも——力んではいけませんよ、力んではいけませんけれども——自分の側ではない、上から何かやって来るものを皆さんそれぞれれの自分らしきをもつて受けとっていただきたいわけです。人生にはいろいろな瞬間があ



りまして、本当の生き方というのは、

「今(いま)のこと」

ということなんです。今ここに。明日でもない。少したつてからでもなければ、今ここに。というその瞬間に、その場に自分を——頑くなであるうと分裂であるうと疑いであるうと何でもいい。今、「みもとに行く」という讚美歌を歌ったのはそのわけなんです——あるがまま何でもいいですから、そのあるがままの自分を投げ入れる。こういうわけです。そういう気合でこれに臨んでください。

このルカ伝24章は——「第三の旅人」と私は『無者キリスト』に書きましたが——今日はその終りの方です。24章36節から49節。ここはある意味において信仰的現実の胸突き八丁というところなんです。ここが本当に読んでいる人が、神学者でも牧師でも暁の星のごとくに少ない。ところが、今私が言ったような気合でかかりますと、読めてしまう。読めてしまうということは、その現実^{じじつ}に、本当に、入れる、ということなんです。

大体、聖書を読もうなんていうのが間違っている。いつも申しあげているとおり、このドラマの中に入るだけの話です。

「このギリシア語がどうだ、このヘブライ語がどうだ」

と、そんな必要はひとつもない。どうも、語学のできる人がそういうことをえらく問題にしている。あなた方は勉強しなくていいと言っくんじやないけれどもね。聖書の言葉は表現の——ギリシア語であろうと、ヘブライ語であろうと、日本語であろうと、ドイツ語であろうと——その根源の言葉、奥の言葉、これが読めなくては。響きですよ。この響きを受けとらなければ、いくら読んでもダメなんです。だから、音楽の世界は素晴らしい。受けとらなければ。

私の書いた『無者キリスト』でも、あれは文字ではない。あれは響きがある。その響きを受けとらなければ、いくら読んでもダメなんです。だから、音楽の世界は素晴らしい。マルチン・ルターは、

「神学と音楽は自分にとっては離すことのできないものだ」

と言いました。ルターの神学は本当に生きた神学です。私は第三巻で、組織神学なんていう言葉は嫌いだから、劇的生命的あるいは劇的有機体的神学、というのを全世界の神学者に向かつて言うつもりだ。私みたいな素人が、なぜそんな元気が出てくるかというところ、それは本当に元気なんだ、元の気なんだ。私の気ではない。根源の気が来ますから。大体、みんな、支那の文字を、いい加減に取り扱っている。元なんだ。もう私は話さない前から澎湃^{ほうはい}としていて。

●「平安、汝らに在れ」

36 此等のことを語る程に、

エマオ途上の二人の旅人が語っていたら、どうですか、もうキリストは彼らよりか速い



んだ。ランナーとしてはキリストは世界最高のランナーです。100メートルだって1秒もかかりはしない。本当にあなた方はもの凄い霊的なチャンピオンになったら、世界の最も速い9秒も切ってしまうようなランナーになれるよ。ひとつ蹴っ飛ばせば、何メートルかヒューツと先に行ってしまうような。誰かやりませんか、それくらいなことを。

イエスその中に立ち、

とは何ですか。イエスはやって来てしまった。こういうところを読んだだけで、もう驚嘆しなくてはいかん。聖書は、いい気な気持ちで読めやしないですよ…(異言)…。こういうところに来ただけで、もう異言になってしまう。私はこの頃、語るのが面倒臭くなってしまふ。イエスは彼らのただ中に立ち、そして何を言われたかというところ、

『平安なんじらに在れ』と言い給う。

「シャールーム ラークーム」

というへブライ語です。キリストの直々の言葉はそうなんです。大体、ギリシア語の聖書が原典なんて思ったら、本当は間違いだ。それは文字の上では原典でしょうけれども、実はその原典の元がある。これは全部アラミ語ですから。アラミ語の資料からギリシア語になっただけの話で、キリストはギリシア語をしゃべらなかつた。キリストはアラミ語へブライ語の方だ。アラミ語の聖書の研究をしなければ、本当はうそなんだ。

「死人は死人に任せよ」

なんていうのも大きな誤訳だ。

「死人は葬儀屋に任せよ。お前は神の国を伝えよ」

と。「死人は葬儀屋に任せたらいいじゃないか。お前は神の国を伝えよ」ということ。「死人をして死人を葬らしめよ」なんて深遠な訳をいろいろ解釈してますが、そうじゃない。キリストはそんな妙な深遠なことは仰らない。死人は葬儀屋に任せなさい。「ミッター」(死者)と「マッター」(葬儀屋)という母音の違いを同じ母音に読んだものだから、ギリシア語にするときに両方とも「死人」になっちゃった。

それで、

「平安、汝らに在れ」

と。安心しろ、心安かれと。単数なら、「平安、汝に在れ」。「シャールーム」というイスラエルの挨拶は、あとの方が大事なんです。男性のときは、

「シャールーム・レカー」

と言う。女性のときは、

「シャールーム・ラーク」

と言う。

「シャールーム・ラーケーム」

は複数するとき。



「平安があなたに、あなた方に在るように」と。
それが挨拶だから、これは世界で最高の挨拶です。

「さようなら」

なんて、諦めるのではない。

「それでは仕方がない、別れよう。さらば」

なんてのは、日本人は諦めがはやい。ドイツ人は諦めないから、

「アフビダゼーン」「また会おうね」

と言う。

●「なんじら何ぞ心騒ぐか」

37 かれら怖じ懼れて見る所のものを霊ならんと思いに、
変化だ、幽霊だと思った。また躓いている。

「なんだ、これは。ちよつと変なのが来たな」

なんて。「思いしに」というのはギリシア語の表現では、「思い続けていたら」ということです。それはどうして思い続けていたかという、鍵がかけられているのに、どうして入って来たかと思つたわけだ。自然科学的に考えた。霊の世界は自然科学的な法則をもうひとつ乗り越えている。霊法が最高の世界ですからね。これは奇蹟でも何でもありませんよ、霊法なんです。奇蹟なんてことを言うからおかしなことになる。

「法」という字は、水が流れ去ることを「法」という。これは自然界の法則なんです。水は低きに対して流れ去る。支那人は偉いですよ、こういう字を造るんだから。漢字は最高の文字です。私は漢字に対しては無条件に尊敬する。それを変てこな略し方をして意味が分からなくなってしまう。この「霊」という字だってそうですよ。これは巫女が口をそろえて雨乞いをしている姿なんです。

38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、

新しい訳は、「あなた方は」なんて書いてあるだろ。キリストが言われるのに、

「あなた方は」

なんて言われたら、くすぐったくなってしまうよな。

「お前たちは」

でいい。

「お前たちは何で騒いでいるか。汝らなんぞ騒ぐか。心が波を打っているね」

何ゆえ心に疑惑おこるか、

疑うかと。恐れ疑いが書いてある。信仰の世界では、恐れ疑いは禁物です。「おそれる」の字は、こっちの「畏れる」はいいですよ、畏れかしこむ方の畏れは。平伏しの方ですから。こわがることはないから。これがまた口語訳聖書では、みんな「恐れる」と書いてある。



ダメですよ。漢字制限なんかするから、とんでもない概念の混乱になる。今の世の中はエキセントリック（中心から外れた、様子や行動が普通ではないこと）だから、中心がズレてしまっている。本当の中心をあなた方は持っているんだから、自信を持たなくてはいかん。私みたいなちつとも霊的でない男が聖書をそのまま受けとつてしまう。

「神の愚か人は人よりも賢し」

というのはそうなんだ。私は神の愚かになる。神愚になる——神愚なんていう言葉はないけれども——神の愚かになりますと、これは学者よりか凄いことになる。

「我は在りて在るものなり」

というのを、世界中のどの学者が、

「我は在りて在らしむるものなり」

と訳しましたか。私は太陽を見て、太陽は在りて地球を在らしめているから、あのモーセへの言葉の真義は、「我は在りて在らしむるものなり」と、神さまの本当の言葉はそうであると思った。ヘブライ語の文法の奥をもうひとつ破つてしまおうんだ。

「それはお前の勝手な解釈だ」

なんて言うかもしれないが、本当の霊法を知らないから、勝手と思う。いわゆる神学のもうひとつ奥です。神学と云えば、これが本当の神学なんだ、逆説的に。

● 霊体

正に霊体です。パウロが言っている霊体はつきりここに出てきた。もちろん、いわゆる肉体がもとに戻ったのではないですよ、霊体なんです。インドに凄いやつがいる。霊界から現れてくる。それがやはり霊体をとるんです。とにかく、凄い現実があるんだ。サレンダーシングだの、スウェーデンボルクなんていうのは、そういう域にかなり達した人です。

世界の医学の方の連合雑誌がある。こないだ、その会合に私は招かれて、

「先生、何かしゃべってくれ」

と言うから、「宗教と医学」と題して一席やった。そして、現代医学の欠陥について——私は医学は知らないけれども——忌憚きたんなく話した。非常にその主催者が感激しまして、これは英語にも訳されています。御霊の知恵の世界は、恐れを知らんです。医学の祖であるヒポクラテスが、

「人間の身体は、賜りたる自然の力と環境の力とによって治るようになってくる。」

薬だの医者なんてものはただその補助に過ぎないんだ」

と言っているんです。今は一番の医学の祖の精神を忘れてる。自然の環境からくるものは具体的に言うと、草根木皮です。だから、化学的な薬はダメ。草根木皮がいい。

ある満州帰りの人が行き詰まったとき、あの信州の黒姫の麓に熊笹がたくさんある平原を見てパッと気がついた。これを何とかしようと思って、熊笹から「延命茶」というもの



を製造した。それで今は大変ですよ、あのお茶は。私たちも飲んでいますが。これは本当にいい。日本のお茶は世界で最高です。コーヒーだの紅茶だのをあまり飲んでではダメですよ、お砂糖なんか入れたのは。

もつと自然に帰らなくては。ルッソーではないけれども。ゲートも、

「自然と親しみなさい。自然を尊重しなさい。人間が自然を支配し、自然を利用している」と今に困る時が来るぞ」

と、はつきり公害現象のことを予言している。あのゲートという人間は自然と溶けている人です。「神・自然・我」というものが溶け込んでいる宇宙的な魂なんです。

「我は神のうちに生き動きまた在るなり」

という言葉が大好きだった。

キリストは自然のもうひとつ奥の靈然の世界に入っていた。この靈然の世界に入ったら、そこは自然法則をもうひとつ超えた法則の世界です。人間の思想なんて大したことないです、イズム、何々思想なんて。ある程度は人を動かすでしょう。けれども、本当に動かすことはできない。超イズムの人、イズムを乗り越えた人、それにならなくてはダメです。イズムをただけなすのではない。イズムはイズムでそれぞれ真理性はありますから。それを把握することができるといふためにはもうひとつ上の世界に入らなければダメなんです。何事でもそうです。同じ次元でああだこうだと言っているうちは始末がつかないんです、もうひとつ上の次元に入らないと。

³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、靈には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし』

「靈肉、靈骨あり」

という。これは大変な人ですね。

⁴⁰斯く言いて手と足を示し給う。⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、

「歡喜の余りに信ぜずして怪しめる」と、おもしろい書き方をしてあるね。うれしくてしようがないので、もう信ずるではなくて、怪しむ。怪しみうれしがる。

「いや大変なことだなあ」

と、うれし怪しんでいる。これは今度は疑っているのではない。とにかく現実なんだからね。

イエス言い給う『⁴²此処に何か食物あるか』

さらに凄いことを言った。そこに何か食べるものがあるかねと。

⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

まあ、こんな現実はおよそ我々の想像を絶したものです。

これを神学者も牧師さんも本当に受けとつてませんよ。私はある学者のグループにいたけれども、みんながこれを笑ったから、

「そうですか、あなた方は笑うんですか」



と、私はそれからそのグループを辞めた。今の日本の一流の聖書学者たちですよ。いわゆる研究者、学者、それはそれでいいだろう。けれども、一番、第一流の人たちは学者でも研究者でもない。創造的な人です。みんなその読んだものはこなしてしまって、新しく創造していく人です。皆さん、どうぞ、どの方面でも創造的な人間になってください。一人の乙女でも決して恐くないですよ、この世界に入ったら。

●キリストの出店

44 また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録しるされたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』

キリストは旧約の預言を——律法、詩篇、預言者——全部その奥を受けとってしまった。大変な人です。モーセの十誡の奥をつかんでしまっている。山上の垂訓、山上の大告白はもちろん十誡以上です。旧約聖書はそこでアウフヘーベン（止揚）されて、もう旧約は要らんという。成就してしまっただから、いつまで旧約なんてやっているかと、まあ、乱暴に言えばそういうことです。もちろん、旧約から発してきますけれども、その流れを全部受けとって、新しき流れにしているのがこのキリストですから。無限無量の人だもの。何人先輩がいたって、みんなそんなものは受けとってしまうよな。大変な二者、唯一者です。

だから、その驚くべきキリストを私は「無者」と申し上げているわけです。この驚くべきキリストが、

「私は何もできない。何も言えない。神さまだよ。お父さんだよ」と言っているんだから。大変な事態です。

「私を見た者はお父さんを見たんだ。私はお父さんの出店だ、でみせ徴だしるし」
と。私たちはキリストの出店、徴でなくては。今日午前も、

「徴となれ、キリストの徴そのものであれ」
と申しあげました。相対的な人間小池は破れ器です。けれども、この破れ器を通して、キリストの徴が表れている。皆さん一人ひとりがそうです。

「いや、私は破れていない。あっちの方が破れ方がどうだこうだ」
なんて、何を言っているか。自分が破れてないような顔しているやつが一番の偽善者です。キリストは、そういうのは

「偽善なる学者、パリサイ人」
と言って退けた。パウロは破れていないと思ったんだ。

「責むべきところなし」
なんて言っているんだから。それでもの凄く熱心であった。この人間的熱心というやつが危ない。その人間的熱心を棄てなければダメです。神からくるところの熱心、神の情熱



(嫉妬) ——これは雅歌書8章に出ている言葉で、日本語の訳にはないけれども——そこに乗っかってしまうと、

「まあなんと、福音は楽音であるか、何でもござれ」

と言う。あなた方、私の言葉を言葉として受けとってはダメですよ。

「はい、その通り」

と言って受けとらなくては。

「まだ私はなかなかそこまで行きません」

ではない。私はさつきから言っているでしょ。今ここに、現に直ちに、無条件の世界です。無条件の世界は無条件に受けとること。あるがまま自分を投げ出さなければダメです。投げ出すところには必ず入ってくる。

「まだ、キリスト教は何年だ」

とか

「まだ聖書はどれだけしか読んでない」

とか、そんなことはひとつも要らん。キリストの弟子たちは聖書を持っていましたか。何も持っていない。キリストという活ける文字、活ける書にぶつかったんだ。

「大自然は神さまの活ける書である。なぜ、書物ばかり見ているか」

とゲートルは言いました。もつとみんな活きのいい人に、本当に活眼活耳にならなくてはダメですよ。大自然に接すれば、本当に宇宙的な人になる。小川を見れば小川となり、嵐を見れば嵐となり、そびえ立つ山を見れば山となる。

私はその点で、藤田東湖の「正大之歌」というのは大好きなんだ。

「天地正大の気粹然として神州に鐘る。」

秀でては不二の嶽と為り、巍々として千秋に聳ゆ。

注いでは大瀝の水と為り、洋々として八州を環る。

発いては万朶の桜と為り、衆芳与に儔い難し。

凝っては百鍊の鉄と為り、鋭利兜を断つ可し」

という。宇宙の正気は、「秀でては不二の嶽と為り」という。富士山はキリストの象徴である。「発いては万朶の桜と為り」と。いいね、桜は。ことに散っているところがいいよ、ひらひらと。霏霏紛紛という。漢語の熟語というのは何ともいえない味をもっている。今の中学高等学校の生徒ははもつと漢文を読まなくてはダメだ。骨抜きみたいなやつばかりで。そして妙に威張りくさって、妙に傲慢なんだ。

●旧約聖書を身体で体現

キリストは旧約聖書を完全に身体でもって体現して受けとってしまった。偉大なる預言者がたくさんいるけれども、全部これを受けとってしまった。そして、それ以上のものを



彼は現象している。だから、イエス・キリストは無限無量だと言っているんです。

「南無キリスト」

と言えば、もうそれでアルファにしてオメガです。キリストに帰入せんというだけです。愉快だね、イエス・キリストは旧約聖書をはつきりここでギユツと把んでものを言っているから。大変な人だよ、まだ30歳くらいだけれどもね。神の霊の止まっている霊止、本当の霊止でなくして、どうしてこういうことがあるか。第二イザヤなんて素晴らしい偉大な預言者だけれども、それはキリストの前にはかなわない。洗礼のヨハネが、

「あの人は、自分はひざまづいて靴の紐を解くにも足らない大変な人だ。聖霊でバプテスマを施す人だ」

と言っている。そういうことをはつきり言っているのに、今のキリスト教会は何ですか。聖霊のバプテスマなくして、按手礼とか洗礼とかやっている。ドイツで私ははつきり言ってやったよ、ドイツのキリスト教もダメだから。どうして、私みたいなやつがこういうことになったか、自分で不思議でしようがない。皆さん一人ひとりが自分を不思議に思わなくては。

45 ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、46 『かく録されたり、

この45節以下は、この現実では、キリストの言葉は実はここでお終いになっている。それから、ある時に復活のキリストがもう一遍現れてこのことを言われたのが一つに書いてある。

キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、

これはキリストが既に預言しておられるから、中身は本ものです。

47 且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、

我は父の約し給えるものを、

即ち聖霊を、

汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』

ここに復活と十字架と聖霊がはつきり出ている。「苦難を受けて」というのは十字架にかかることです。キリストは苦難を受けて、即ち十字架を背負って、十字架にかかって、三日目には甦る。そして、キリストの名によって罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まる。

「悔改」というのは方向転換ということ、魂の方向転換です。ただ悔いて改めるのではない。もつと積極的なことです。十字架は贖罪なんです。これはイザヤ書53章にはつきり預言されているとおり、罪の赦しです。



●十字架・聖霊の絶対恩寵

「罪」とは、この罪かの罪ではない。我々の存在そのものが罪なんです。我執であるから。この我執というのが罪なんです。自分に囚われて、自己本位であるということが罪なんです。それをドイツ語で「イッヒツ」という妙な字がある。これは字引を引つ張つてもおそろく出てこない。ある哲学者が使った言葉です。「エゴイズム」という。「エゴ」というのはギリシア語で「我」だね。人間は生まれながらにしてエゴイズム、自己中心なんだ。だから、要求ばかりしている。明後日からのストライキだつてそうだ。まあ、いろいろな社会的な事情もあるでしょうけれども、お互いに本当に忍んでいかなければ、どうにも解決しない。もう結局、心の問題になる。

この「イッヒツ」を否定するものが「ニツヒツト」(否^{いな})なんです。そして、こいつを名詞化すると

「ニツヒツ」「無」

となる。これが私の言っている「無私」なんです。私心の無い世界です。「イッヒ」「私」を否定する。頭で否定するのではない。

「神さま、あなたは然りですが、私は自分に対しては否です」という人に成らなければ。ところが、私たちは成れないんだ。

「先生、なかなか、成ろうと思つても成れません」

と。それは成れないさ。もし成れたら、キリストは十字架にかかる必要はなかった。イエスが十字架にかからなくてはならなかったのは、私たちが無私になれないからです。そういう虫のいいやつだから。そういうことですから、この自我というやつは。だから、パウロが言つたではないですか。

「われキリストと共に十字架せられたり」

とは何事ですか。日本語で簡単に、楽に言えば、

「キリストの十字架で私は完全に自分自身を片づけてしまった。私は片づけられませんでした。キリストの十字架は私を片づけてくださいました」

ということですよ。私は片づいてしまっているんだから、問題があつたつてなくたって、そんなことは問題ではない。もう片づいている。

「まだ私の信仰は、まだ聖書知識は、まだ私の愛は、まだ私の何とかは」と、そんなことは問題じゃないですよ。どうして、いつまでも問題にしているんですか。

けれども、それをいい加減に取り扱つてはいかんですよ。いい加減に取り扱つているから、いつまでたつても始まらない。本当に、ある時、決定的にこの十字架が受けとれなかったらダメです。十字架を受けると同時に聖霊がくる。あるいは、逆な場合もある。聖霊にぶつかつて、そして本当にくずおれて、十字架にくる。どのみち十字架にぶつからなくてはダメなんです。



聖霊にぶつかって、十字架の贖いのことをいい加減にしていたら、必ずその信仰は浮いてしまう。そして、どこかで行き詰まったり、エキセントリック（中心から外れている）になったりする。何と言っても十字架は土台なんです。無教会は「十字架、十字架」と言っているけれども、今度は十字架が観念化しているから、これまた困ったもんだ。

なぜ、キリストは十字架にかからないではいらなかったか。これは旧約のイザヤ書の贖罪の預言を満たさんがためである。

「我らの不義のために砕かれたり」

とは、十字架の砕けを彼は受けとった。これによって私たちの罪は赦された。はつきり書いてある。その十字架によって私たちは、問題中にありながらもはや問題を乗り越えた人になっている。無私の現実をいただく。その無私の世界には無限無量なものがやってくる。これが聖霊です。だから、

「待っている。父の約束し給えるものを汝らに送る」

とは聖霊のことです。

「祈って待っている。そうしたら、聖霊がやって来る。私もし十字架を通らなか

ったら、聖霊は来ないんだ」

ということをキリストははつきり言っているわけなんです。旧約においては十字架がありませんから、いくら預言者といえども、預言者たちは、霊は来たけれども本当の聖霊の世界とは違う。一番厳密な意味において、キリストの霊だけを「聖霊」と言うんです。

そこが仏教とは、仏教の大慈大悲の世界とは、何といっても違う。私はもちろん、仏教も尊敬しますよ。けれども、どんな仏教の真理でも、キリストの光に照らすと、みなこれが読めてくる。これは不思議です。決して、それを私は排除しない。全部包摂してしまつて、位置づけることができるようになってくる。私の詩の中にも出てくるでしょう。偉大な坊さんたちの事態を私はもちろん心から尊敬いたします。しかし、それはキリストの光で見ているから、本当に彼らの素晴らしさと、また仏教の限界が見えてくる。禅宗の悟りも素晴らしい。けれども、私たちのは悟りの無ではない。賜りたる無なんです。この賜りたる無は必ず即無限無量に、復活と聖霊の事態に飛び込めるわけです。真空にはしておかない。光が射してくる。そういう絶対、恩寵、の事態がこの終りの方に約束されている。

●主と一体一如になる

³⁹我が手が足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし』

これをいい加減に読んで困る。この「撫でて見よ」という言葉は、ヨハネ第一書一章一節の、

「つらつら手にて触り」



という言葉と同じ言葉なんです。神の言即ち、神の現象体です。「言」と言ったって、キリストは神の表現体です。「言」という語がまた躓きになって困るよね。プロテスタントはすぐ「御言、御言」なんて言って、聖書の言葉の意味ばかり考えている。意味ではない。実質ですから、この活ける言、キリストというロゴスは。

「目にて見、耳にて聞き、手にて触りし」

と不思議なことが書いてある。霊眼で見、霊耳で聞き、霊の手で触れる。具体的にはみなそういう霊的な現実です。

「自分には肉と骨とがある」

というのは、これはキリストの霊骨、霊肉です。だから、

「わが骨の骨、わが肉の肉」

とアダムがエバに言った言葉、あれを私たちは使うことができる。

「私の骨の骨はキリストである。私の肉の肉はキリストである」

と。そういう霊肉渾然たる^{こんぜん}ところの救いの中に入っていくんです。キリストが

「わが肉をくらえ、わが血を飲め」

と言われたことは何かというと、そういう霊的な現実のことをいうわけです。だから、

「主さまー」

と言うときには、主と一体になる。一如になる。「主さま」なんて言って、遠くにいると思ったらダメですよ。どこにいらっしやるかと思ったら、自分の腹の中にいらっしやっただけ、いつも書いているとおり、

「神—キリスト—我」

というのはこういう内在関係、内在関係です。信仰の現実はすべてこの内的なものです。隔たりがあるものではないんです。「如の世界です」。

もう何々宗派でも何でもありません。キリスト、直結になってください。無教会主義とか、何とか宗派とか、プロテスタントにもたくさんあるよ。それから、カトリックはカトリックで自分でちゃんと枠をつくっている。みんなダメです——「ダメ」と言って、私はただ否定していることではないけれども——

「使徒的信仰（アポストオリッシェル グラウベ）に立ち帰れ」

と言っているわけです。

御霊でひっくり返され、本当に十字架を受けとったところのパウロさんは何ととっても土台石です。天界にこの使徒たちが私たちの味方であるし、優れた友だちですから、私は誰に反対されようが、何とけなされようが、たとえ一人になろうが、絶対退かん。私が自分で偉がるのでも何でもない。そういう本願の力が来ているからです。そして、本当にそうだとわけて、同じ志の方々と本当に兄弟姉妹です。地上にあつて既に天的な関係なんです。地上のいろんな人間的な関係で何か非常に区別するようなことは、地上ではそ



うでしょう。けれども、地上にありながら本当に兄弟姉妹ということは、もう永遠の現実です。天国は、私たち自身が即ち天国です。キリストは、

「お前は今日、私と一緒に天国だよ」

と言ったではないですか、パラダイスだよと。パラダイスの中を歩いている。世の中がどんなに冷たかろうが、どうであろうが、そういうパラダイスを自分で展開していくような人になっていくわけです。

「汝らは世の光なり」

とはそのことではないですか。

「お前は回りを明るくするよ、温かくするよ」

と。キリストによってそうされているんだから仕方がない。

「我は光なり」

と言えるんです。

● 十字架の門から聖霊の世界に入る

罪の赦しの十字架と、この死んでも死なない永遠の生命を御霊において受けとっていく。観念で言っているのではないですよ。どうぞ、皆さん、毎日の生活で本当にキリストの中に自分を投げ入れていくことです。どこでだって祈れるんですから。祈りの時間なんて別に要らない。電車の中であろうと、目をつぶってごらん下さい。それはもう直ちに密室だから。雑音なんかあつたつて一向差し支えない。それだけの弾力性のある魂になってください。運命環境なんか本当に乗り越え、また自在に支配していく。そういった生命の霊的法則の中に入っていくと、これが本当の自由です。

今、自由だの自主だのと言っているのは、おかしくてしょうがないよ、そんなものは。そのことはマルチン・ルターが『キリスト者の自由』で言っているし、そのような素晴らしい世界を親鸞が『歎異抄』で言っている。一流のものを相手に読みなさい。

そして、聖書はそういった現実だから、頭で読むのではない。その現実の中に自分を投げ込んで――たった一句でいい。一日一句だつて構わない――本当にその中に溶け込んでいかなくは。聖書を読むとは聖書の現実に入ること。そのドラマの中に自分を入れることなんです。

こういう花はしおれていくよ。しおれていくけれども、咲いている花において、あるひとつの永遠的な質を見る人にならなくてはダメですよ。過ぎ行くものの中に過ぎ行かざるものを見ていくような人にならなければ。それを把むような人にならなければ。だから、諸行無常であると同時に、決して諸行無常でないんです。福音の世界はそういうことは仏教的な雰囲気とは違うんです。いいですね。

キリストの復活なんていうのは、霊体のキリストがお魚を食べたりするんだから、もう



たまらんです、このキリストというひとにでつくわしたら。あなた方、福音書のキリストの言葉は意味がどうだではないですから。

「わが言は靈なり、生命なり」

とは形容して言っているのではない。キリストは、

「ラザロよ、出でよ!」

と言ったら、本当にラザロは起き上がってきたではないですか。キリストの根源の生命は発しては言となり、発しては手足の行となる。言も行も同じことです。だから、私は言行一如だと言っている。

どうぞ、そういうことで、もう楽しくてしようがないし、どんな苦難も引き受けてくれる。だから、悲しんでいる人に、

「どうしましたか?」

と本当に集会に引張つてきなさい。生かしてあげるから。

「私は今日は調子が悪いから集会に行けない」

なんて、冗談じゃない。調子の悪いときこそ来てくれなければ。

「今日は行くべきところがあつたけれども、そいつを捨てて、生命賭けのところに

来ました」

というのがきつきのHさんの告白ではないですか。ある時は、この世の義理を破つて来なければダメです。

「来客がありましたから、行けません」

なんて、何を言っているか。来客を引張つて来ればいい。人間は、ある本もののでつくわすまでは、どの人の魂も本当に生きることができないようになっていく。神さまは一人ひとりの魂をそういうように造つていらつしやる。それをいい加減なことで満たそうなんてしているから、いつまでたつても始まらない。

● 祈り

それでは祈りましょう。キリストの十字架の門から平伏してその中に入る。その先は詩篇23篇のごとき広々とした緑の野、憩いの水汀、みぎわ聖霊の気のすがすがしい世界です。何も構える必要はない。あるがままに「主さま!」と叫べば、直ちにみ懐の中に入る。キリストはそのようにして、一人ひとりを本当に小羊を抱きあげるごとくにしてくださっているのです。

では、私が祈りますから。新しい方もいらつしやるけれども、何も恐いことはありません。祈りの世界は無風のごとく、またそよ風のごとく、あるときは嵐のごとく、いろいろ自在ですから。そういう現象でどうのこうのと思わないでください。

祈ります。神さまの御言を伝え、また憫あわれみのもろもろのの業わざをなし、人たちを本当に憫み、



死人を甦らせ給うたところの、私たちの贖い主キリストさま。あなたは、私たちのどうにもならない罪を十字架をもつて贖いとり、

「もう心配はいらん、自分を見ることはいらん。私を見なさい。私の中に入つてきなさい」

と言つてくださいます。私たちは道徳も哲学もどうすることのできないダメなやつですが、しかし、それに新しき道を開き、

「我は生命なり、道なり、真理なり」

と、真理そのもの、道そのもの、生命そのものであるあなたが、私たちに自分を与えてくださいました。かくして、あなたは死んでも死なないところの驚くべき霊的生命をもつて復活なさり、そして、

「今にお前たちの中に同じ生命を与える、それは聖霊によるのだ」

と言つて、この聖霊を約束され、そして、躓いたすべての人たちをも深く顧みて、

「必ず今にお前に本当の喜びがくる」

と。この喜びの音信そのものを約束し、天界に行かれた主さま、今日はその角度から私たちは終日あなたに接し、あなたの中にとり入れられ、感謝です。

今晩はまた、Mさんたちがやって来て喜びを共にし、御名を讃えることを共にしてうれしく存じます。諸所方々の集会において決して形式ではなく本当にあなたの中に打ち込んだ、あなたの御名を讃えた復活節であったことを信じていますが、どうぞ、今、観念化しているところのキリスト教に対して、実はそうではないと言つて、私たちは使徒たちのこの原始の事態に戻り、そして、新しくこの希望なきところに天来の希望を与え、光を与え、喜びを与え、私たちを通していかにもして、求めている人、悲しんでいる人、苦しんでいる人にこの喜びの音信を――音信とは決してただ言葉ではありません――この事態をいかにもして伝えさせてくださるよう願います。一人ひとりをお使いください。私たちはいかなる時も必ずその証しができることを信じて、御名を讃え奉ります。

あなたはその諸々のチャンスを自由自在にお使いなるがゆえに私たちの胸襟を開いて、今、特に日本においては教育もすべて行き詰まっています、この事態をいかにもして、受けとった人たちが隣人に伝えていくことができますよう切に願います。波状的に展開することがあなたの御意であると存じておりますが、どうぞ、受けたる恵みはどしどし流れ流れていくところに、本当に限りなく豊かに注いでくることを信じて感謝いたします。今日、兄弟姉妹たちは、その意味において新しく何ものかをここに置いて受けとって帰ることができ、誠にうれしく存じます。

「神さま、ああこの新しきキリストの生命を何をもって代えることができるか」

と、魂の中では、はらわたの中では絶叫しながら御名を讃えつつ進んで参ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

